

第12回

ビザンツ帝国

監修・講師
大月康弘

学習のねらい

ビザンツ帝国は、キリスト教を国教としたローマ帝国。古代ローマの技術や文化を受け継ぎ、都市（ポリス）を基盤に文化が花開いた社会だった。4世紀初頭に首都コンスタンティノープルを造営、以後「東ローマ帝国」とも呼ばれた。西ローマ帝国滅亡（476年）後、6世紀にユスティニアヌス帝が、西帝国の領土の大半を再征服。また『ローマ法大全』を後世に残して、ヨーロッパ世界の法律の大本とし、近代日本の法律にも影響を与えた。キリスト教を保護し、信仰に基づいた「寄進」が活発になり、ヨーロッパ文明に大きな影響を及ぼした。

- ・ <コンスタンティノープルの繁栄>
・ 聖ソフィア聖堂 モザイク画
- ・ <ローマ帝国の継承>
・ ローマ法大全 大帝国の再建
- ・ <キリスト教会の展開と分裂>
・ 寄進 五本山 聖像崇拜禁止令

■■■ コンスタンティノープルの繁栄 ■■■

皇帝コンスタンティヌス（在位 324～337年）は、ササン朝ペルシアと戦う必要から、ローマ帝国の首都を東に移し、コンスタンティノープルを建設した。またキリスト教を容認した結果、教会や修道院が多く建てられるようになった。

コンスタンティノープルの町は、帝国の都として、東西南北、あらゆる地域から来訪者があり「世界の中心」と呼ばれるほど栄えた。古代のローマ帝国は、元老院を中心として、都市ローマの貴族層が、地方社会を軍事的にも経済的にも支配する社会だったが、ビザンツ帝国は、広く有能な若者が活躍する、自由でエネルギッシュな社会だった。

ローマ帝国の継承

ビザンツ帝国の人々は主にギリシア語を話していたのでギリシア人と言えるが、自らを「ローマ人」と称し、いわばローマ帝国の理想を追い続けたギリシア人だった。帝都コンスタンティノープルには、ローマの土木建築の代名詞とも言える水道橋や、別名「地下宮殿」とも呼ばれる貯水池が造られている。ローマ帝国の理想をもっとも強く継承したのは、皇帝ユスティニアヌス（在位 527～565 年）だった。

西ローマ帝国滅亡後、ユスティニアヌス帝はゲルマン人国家が支配するようになった北アフリカやイタリア半島を、およそ 20 年の歳月をかけて奪還し、再び地中海を内海とするまで帝国領土を回復した。また共和政の頃からの膨大な数の法律を整理しまとめる大事業を行った。編纂された法典は『ローマ法大全』と呼ばれ、その後の近代のヨーロッパ諸国、ひいては近代日本の法整備に大きな影響を与えた。

キリスト教会の展開と分裂

ユスティニアヌス帝は「皇帝は神の代理人」という立場でキリスト教を厚く保護。聖ソフィア聖堂を寄進し、シナイ山に聖エカテリニ修道院を建立した。5 世紀から 6 世紀にかけては、地震や飢饉が多く発生し不安が広まるなか多くの人々の間にキリスト教が浸透。個人がそれぞれの意思で財産を寄進するようになり、都コンスタンティノープルのみならず地方にも多くの教会が建てられた。しかし、7 世紀になり東にイスラームが生まれると瞬く間に勢力をひろげ、キリスト教の大教会があったアレクサンドリア、エルサレム、アンティオキアがイスラームの支配下におかれた。

また、8 世紀にはローマ教会がゲルマン人の建てた国との結びつきを強め、コンスタンティノープル教会との間で主導権を巡って対立。皇帝レオン 3 世（在位 717～741）の勅令「聖像崇拜禁止令」によりローマ教会との溝は深まり、やがて袂を分かつことになる。

考えてみよう 調べてみよう

- ビザンツ帝国の版図、都コンスタンティノープルの場所と見事な景観を知ろう。
- キリスト教社会の誕生と、皇帝ユスティニアヌスと皇后テオドラの事績について調べてみよう。
- キリスト教を基礎にしながら自由でエネルギッシュな社会が形成された理由を考えてみよう。